

地方都市在住者の生涯学習に関する 参加要因の検討

—フィンランド・ロヴァニエミ市での事例調査から—

Reasons for participating in lifelong education in rural area:
from the investigation in Rovaniemi, Finland

Kyo Otani

大谷 杏

要旨

フィンランドの高い生涯学習への参加率の要因はどこにあるのか。地方からその要因を探るべく、ラップランド地方の都市、ロヴァニエミ市にある 2 つの市民カレッジへのインタビュー調査を行った。結果、1. 公立と私立の市民カレッジの役割分担、2. 開講日時の工夫（平日・夕方以降）、3. 学習者のニーズに基づいた講座設計、4. 既存の施設の活用、5. 安価な受講料、6. 積極的な広報活動という特徴が明らかとなり、それらが同国の生涯学習参加率の向上に貢献しているのではないかと考えられる。

キーワード: 生涯学習、市民カレッジ、リベラル成人教育

Keywords: lifelong education, civic college, liberal adult education

1. はじめに

近年、地域づくりや社会人の学び直しの推進などを含む「人生 100 年時代を見据えた生涯学習の推進」を目指して、国や各地の市町村による生涯学習に関する調査・研究や様々な取り組みが行われているが、OECD の調査によると⁽¹⁾、日本の働く世代（25～64 歳）のノンフォーマル教育への参加率は 41% に留まっており、世界トップクラスの参加率を誇る北欧のフィンランド（62%）、スウェーデン、デンマーク（共に 61%）と比較すると未だ発展途上の段階にある。

今後、より多くの人々が生涯学習に参加するためにはどのような方策が必要なのか。フィンランドの様々な地域の事例から検討していくことを目的に、本稿ではとりわけ市町村合併により広大な市域

を有する地方都市ロヴァニエミの調査から、その一端を明らかにすることを目的とした。フィンランドでメインストリーム以外の生涯学習が盛んな理由として、森田（2017）は、現地の大使館への調査から、残業が少なく、余暇の時間を確保しやすいがゆえに、人々が多趣味で人生を楽しむことに優れていることを挙げている。また、大橋（2010）は、先行研究から、国家による主導的・財政的支援が同国の成人教育の参加率向上に大きく関与しているとした。今回の調査では、労働条件や財政面以外の側面である、施設の立地、広報、学習内容を含めた学習機会の提供方法に着目したい。

調査は、2019年8月にロヴァニエミ市にある公立と私立2つの市民カレッジを訪問し、インタビュー形式で行った。各施設への聞き取りと共に、現地で入手した講座案内の小冊子の分析から、現地の生涯学習への参加率向上に寄与していると考えられる特徴的な要件を明らかにする。

2. フィンランドのリベラル成人教育とロヴァニエミ市の概況

2.1 フィンランドのリベラル成人教育

フィンランドでは、学位や資格を提供しない、誰もが参加することのできる成人教育はリベラル成人教育と呼ばれる。リベラル成人教育を提供する機関には、市民カレッジ（「成人教育センター」と英訳される場合もある）、フォークハイスクール、学習センター、スポーツトレーニングセンター、夏期大学がある(2)。これら機関には、中立的な活動を行うものと、様々な価値観に基づく活動、例えば、ある世界観や宗教的信念、地域や市民のニーズに基づいた活動を行うものいずれも含まれる。したがって、市民カレッジには公立だけでなく、私立のカレッジも存在し、教育機関が学習の目的や内容に決定権を持つ。リベラル成人教育法（632 / 1998）によれば、リベラル成人教育の目的は、「生涯学習の原則に基づき、個人の個性とコミュニティで活動する能力の多様な発展を促し、社会の結束、平等、地域活動への積極的な参加を支援すること」にある(3)。そのため、市民カレッジは、地域と市民のニーズに対応し、自発的な学習の推進と市民の能力開発を担う。2019年度、リベラル成人教育に対し、総額1億5523万€（日本円に換算すると、2020年10月27日現在で約192億円）が国家予算として生まれ、そのうち最も多い8,408万8,000€（約104億円）が市民カレッジに充てられていた(4)。2020年現在、国内には178の市民カレッジがあり、毎年フィンランドの国家人口の10分の1以上に当たる65万人が通っている。市民カレッジの歴史は長く、2019年には120周年を迎えた(5)。

2.2 ロヴァニエミ市の概況と市民カレッジ

ロヴァニエミ市はフィンランド北部、北極圏の入り口に位置するラップランド地方の中心都市で、約63,000人（2019年末現在）が暮らす、国内で17番目に人口の多い街である(6)。日本の兵庫県とほぼ同じ8,017㎢という広大な市域の中には、多くの村（集落）が点在しているが、中心部に市の人口の89.7%が集中していることから、市全体の人口密度が1㎢あたり8人であるのに対し、中心部は1㎢あたり376人となっている。市内には、サンタクロース村やスキーリゾートの観光施設など

があり、年間 50 万人の観光客が訪れ、うち 6 割が海外からである。そのような土地柄から、人口の 84%がサービス業に従事している (7)。

市の人口は年々増加傾向にあり、全国平均と比べると 0～14 歳、15～64 歳の人口の割合（全国平均 16.2%、62.5%に対し、16.5%、64.9%）が若干高く、65 歳以上の割合が少ない（全国平均 21.4%に対し 18.5%）。また、スウェーデン語話者の割合（全国 5.2%に対し 0.2%）や、外国人の割合（全国 4.5%に対し 2.5%）も全国平均に比して少ないというのが特徴的である。なお、外国語話者の間で最も多く話されている言語は、ロシア語である。

3. 調査の概要と結果

3.1 インタビュー調査概要

日本国内での情報収集、文献調査の後、ロヴァニエミ市内の 2 つの市民カレッジを訪問し、インタビュー調査を行った。以下はその概要である。これらのインタビュー以外にも、市内の繁華街でそれぞれの市民カレッジや講座の広報の状況を調査した。

① ロヴァニエミ市立市民カレッジへのインタビュー調査

調査日：2019 年 8 月 20 日（火）13：00～14：00

調査地：ロヴァニエミ市市民カレッジ事務所

協力者：校長 リータ・アネットヤルヴィ氏

② ロヴァーラ・ロヴァニエミ市民カレッジへのインタビュー調査

調査日：2019 年 8 月 21 日（水）13：00～14：30

調査地：ロヴァーラ・ロヴァニエミ市民カレッジ（施設見学会）

協力者：校長 タルヤ・コノラ・ヨキネン氏

両カレッジ共通の質問項目は、1. センターの立地、2. 広報方法、他機関との協力関係、3. 学習者の状況（登録者数、属性、通学形態など）、4. 講座について（人気講座、地域的な講座）、である。

3.2 調査結果ーロヴァニエミ市立市民カレッジ

ロヴァニエミ市立市民カレッジ（以下、市立カレッジ）は、1975 年にロヴァニエミ地方成人教育カレッジとして設立され、2006 年にロヴァニエミ市が近隣自治体と合併したことにより、現在の名称となった。カレッジでは、インタビューに応じてくださった校長の他、事務担当者、2 名の常勤教員、年間 55～65 名の非常勤教員が働いている。カレッジの財源は、学習者からの収入 20%、政府の補助金 57%、市の補助金 20%の計 76 万 6,122€（日本円で 2020 年 10 月 28 日現在、9,383 万円）である。

3.2.1 センターの立地

ロヴァニエミはとても大きな街で、その中に様々な村がある。市立カレッジでは、市内の 38 か所で教育の機会を提供している。講座が開講されるのは、地域の小学校、村の学校、体育館、クラブハウス、賃貸の施設などである。遠い所では、市の中心から 90 km離れた場所に 10 名ほどの演劇グループがあり、夏に演劇をしている。講師は市の中心部から毎週車に乗り、3 時間教えに行っている。その他、市中心部から 50 km離れた所にとっても良い学校があり、ピアノ、成人のための合唱、ハンディクラフトなどの科目が開講されている。学習者は主に自家用車で参加しているが、遠隔学習も行っている。街に住む人と郊外に暮らす人とでは興味や関心が異なることから、市立のロヴァーラ・ロヴァニエミ市民カレッジは主に比較的小さい範囲に住む街中の学習者をカバー、市立カレッジはロヴァニエミ市全域に対応している。フィンランドの殆どの市が市立カレッジのような教育機関を持っており、ラップランドには 13 の街にある。

3.2.2 広報方法、他機関との協力関係

主に、地元の新聞、ロヴァニエミ市立市民カレッジのページ、各村やロヴァニエミ市のフェイスブックページへの掲載、紙媒体の講座案内の小冊子（インターネット上でも入手可能）などで、講座やイベントの広報活動を行っている。毎年作成されている小冊子には、講座名、概要、時間、料金等が記されている。受講生募集開始時期に、校長も含め教職員自らが繁華街で小冊子を配布する、講座のデモンストレーションを行うという方法も採られている（写真 1、写真 2）。2019 年度、ロヴァニエミ市が市立カレッジとロヴァーラの協力を決定したため、史上初めて私立のロヴァーラと合同で小冊子を出した。小学校、職業学校、ラップランド大学、ジョイントプロジェクトやトレーニングのために、ラップランド地方の他の市民カレッジとも協力関係にある。



写真 1 講座のデモンストレーション
(Rovaniemen kaupungin kansalaisopisto
Facebook ページより (8))



写真 2 繁華街のラックに置かれた小冊子
(2019 年 8 月 20 日、筆者撮影)

3.2.3 学習者の状況

市民カレッジでは、あらゆる年齢層の住民に講座を提供している。街から遠く離れた村々では特にやることもないため、全ての年齢層の学習者に対応する必要がある。最も多い年齢層が60歳以上で全体の42%、次に多いのが19歳以下で13%、55～59歳が10%であり、最年少の学習者はドラムを学ぶ4歳、最年長はハンディクラフト講座に参加している91歳である。1人で5～10講座受講する人もいるため、実際の学習者は1,800名ほどだが、延べ人数にして3,351名(2018年度)となる。国籍別では、99%がフィンランド人、その他1%がスウェーデン人、ドイツ人、フランス人、ロシア人、スペイン人などの外国人である。観光業で働いている人が多く、入れ替わりも激しいが、市立カレッジではそのような市民の受講も歓迎している。フランス人など観光業の人は冬の期間が忙しくなるため、時間がある夏に講座を取るなどしている。

学習者の参加動機には、何か違うことをしたい、新たな技能を身に付けたいというものがあるが、中でも、他人に会いたいという動機が重要であると講師からも聞かれる。他人と会話をする事、カレッジが「ソーシャルプレイス」となっていることで、学習者が健康的に過ごすことができる。

3.2.4 講座について

講座は1年のうち、9月1日から5月1日まで開講されている。コース設定にあたっては、毎年1月に講師が開講場所に出向き、要望を尋ねる。音楽、合唱団、美術、銀作品制作、磁器、デッサンや写真、ヨガ、ラップランドの工芸品、織物、物の修復等の講座があり、言語、スポーツ、料理、情報技術、狩猟のライセンス取得、ヨガ、マインドフルネスなども人気がある。狩猟のライセンス講座をはじめ、編み物、ダンス、鍛冶、鉄の加工、工芸品制作、トナカイの骨や革、毛皮を使った工芸品づくりなどはラップランドに特徴的なものである。私立のロヴァーラ・ロヴァニエミ市民カレッジでは、日本語を含めた語学講座がたくさん開講されていて人気もあるようだ。

3.3 調査結果ーロヴァーラ・ロヴァニエミ市民カレッジ

ロヴァーラ・ロヴァニエミ市民カレッジ(以下、ロヴァーラ)は、セツルメント(ロヴァーラ・セツルメンティ)を母体とし、1921年に設立された。同じ敷地内にロヴァーラ・セツルメンティが運営する市民カレッジとフォークハイスクールがあり、協力関係を築いている。ロヴァーラは私立だが、目的と事業内容は市立カレッジとほぼ同じであり、講師の労働環境の面でも若干の違いが見られるのみである。私立であっても、定められた授業時間数により国から直接の財政支援があり、10,000時間の割り当ての中で補助金額は1時間あたり137€、その割合は運営資金の57%に相当する。その他の部分は学習者からの受講料収入と少額ながらも市からの補助で賄っている。1970年代以前は、私立の市民カレッジであっても国から100%の支援があった。

3.3.1 センターの立地

セツルメント敷地内にある本部の建物と、工業地帯に大きな施設、その他いくつかの施設があり、講座によって開催場所が異なる。とりわけ、工業地帯にある施設には工具が備えられていることから、金属加工、ペインティングなどの講座が開かれている。学習者はロヴァニエミ市全域からバスや徒歩などで来校するが、それは個人の興味や関心とも深く関わっている。35 km先からの人もいれば、ごく近隣から通っている人もいる。ラップランドではあまり娯楽がなく、どこへ行くにも距離があり、車がないと生活できない。そのため、人々はバスも利用するが、バス便が必ずしも充実しているとは言えないため、各家庭には自家用車がある。ロヴァーラは街の中心、市立カレッジは主に周辺部で講座を開講している。ロヴァーラと市立カレッジの前身となる教育機関の発足は、ほぼ同時期の100年前に遡る。当初、ラップランド全域で講座を開講していたが、フィンランド国内の教育制度が整い、市立カレッジが市全域で講座を開講し始めたため、ロヴァーラは街中での開講に集中することとなった。市立カレッジの面白い講座には、違う地域から車で通う人もいるようである。

3.3.2 広報方法、他機関との協力関係

古くから行われているのは、登録開始日の前日に新聞のコラムに概要等を記載する方法である。近年では、フェイスブックを利用して講座の宣伝も行っている。

市立カレッジとは協力関係にあり、一部先述した通り、ロヴァーラが講座を10,000時間、市立カレッジが6,000～7,000時間講座を提供している。また、ラップランド市民カレッジ連合の会合も年に1、2回開かれており、連合は政府に対し予算要求をする手段として機能している。他のカレッジと一致団結することにより、とりわけ喫緊の課題である、情報技術、アンドロイド、ICTに関する人材育成、年配者向けの無料ICTクラスを行う際に必要となる資金などの予算要求も円滑に進む。数年前、急増した移民に対応するためにフィンランド語講座を増やす必要が生じた際にも、連合を通して予算要求し、政府や教育省から補助金を得た。その他、全国的な組織である市民カレッジ連盟（本部はヘルシンキ）にも加盟しており、年1回の会合の他、過去にはスウェーデンへの訪問も行われた。

3.3.3 学習者の情報

年間2,000人ほどが利用しており、50～75歳の高齢者層が全体の55%を占める。最高齢は90歳である。

3.3.4 講座について

音楽、ハンディクラフト、言語、体育、健康、芸術、情報技術の講座と共に、人々が興味を持てる、知りたいと思うような内容の講演（歴史、社会政治、スペインの文化、アメリカ大統領選のシステム）も開催している。これら講演については、専門知識を持った応用科学大学や大学の教員に依頼することもある。講座に関して言えば、ハンディクラフトの講座には男性参加者が多く、運動の講座には若

者の参加がある。子ども向けの演劇講座には、「どうやって飛ぶのか」などを想像する等自分自身を表現するものから、紙とペンを使って何かを記述する伝統的なものまで、様々なものがある。言語コースは英語が一番多く、イタリア語、スペイン語なども人気がある。

基礎教育が無料のフィンランドでは、お金を払わなくてはならない生涯学習に関して学習者の目も厳しい。そのため、学習者からは多くのフィードバックを得ることができ、修正すべき点を指摘された場合は、できる限りのことを行う必要がある。学習者、講師、全ての関係者が満足であれば、その講座を継続する。また、高齢者を対象とした ICT 講座、スマートフォン講座などを一通り終えた人向けに、ビデオの編集などさらに高度な次の段階への講座も必要となる。これら講座設計は、学習者からのフィードバック、意見、要望など、ニーズに基づいて行われる。例えば、寿司の作り方を習いたい人がいれば、料理のコースを作るなどである。講座設計後、専門家や中等学校の教員に意見を求め、開講へと至る。セツルメントから発したロヴァーラの設立理念は、このような人々のニーズに合ったコースの提供といくらか関わっている。

4. 小冊子の情報分析

4.1 ロヴァニエミ市市民カレッジの開講施設

ここからは、ロヴァニエミ市市民カレッジとロヴァーラ市民カレッジが合同で作成した講座案内の小冊子 (9) の内容を分析する。表 1 は、小冊子に書かれたロヴァニエミ市市民カレッジの講座内容や住所、施設名から講座が開講されている集落 (村) を特定し、Google Map で最短自動車経路として測定した市中心部からの距離と、市の統計からそれぞれの集落の人口、講座の開講施設数と開講施設を市中心部から遠い順に記したものである (10)。なお、周辺写真等を確認しても施設の形態が特定できなかったものについては、「施設」とした。インタビューにあった 38 か所を超えてしまうことから、いずれかの部分で重複が見られると考えられる。パーヴァルニエミに関しては人口の記載がなかったため、空欄とした。

表から読み取れるのは、第 1 に、開講施設として、村の家 (キュラタロ) や学校など、既存の施設が活用されていることである。生涯学習のために新たな施設を建設するのではなく、他の目的で作られた施設を会場として用いている。第 2 に、ポロカリ、アウティ、マラッスヤルヴィ、ティアイネンなど中心部から遠く離れた人口が 100 人に満たない少人数の集落にも、生涯学習の機会が提供されていることである。第 3 に、中心部から 23 km を境に人口の急激な増加が見られ、複数の開講施設を持つ集落が出てくることである。また、開講施設の増加は、施設の多様化にも繋がる。郊外では主に、村の家や学校が開講施設となっていたが、26 km を境に村の家での開催がなくなり、サーレンキュラのように人口が 1,000 人を超える集落では、学校その他、保育園、図書館や講堂が開催場所となる。最後に、両校のインタビュー調査でも言及のあったとおり、市立カレッジは、中心部 2 か所でのみ講座を開講しているに留まり、中心部以外での活動が主となっていることがこの表からも読み取れる。

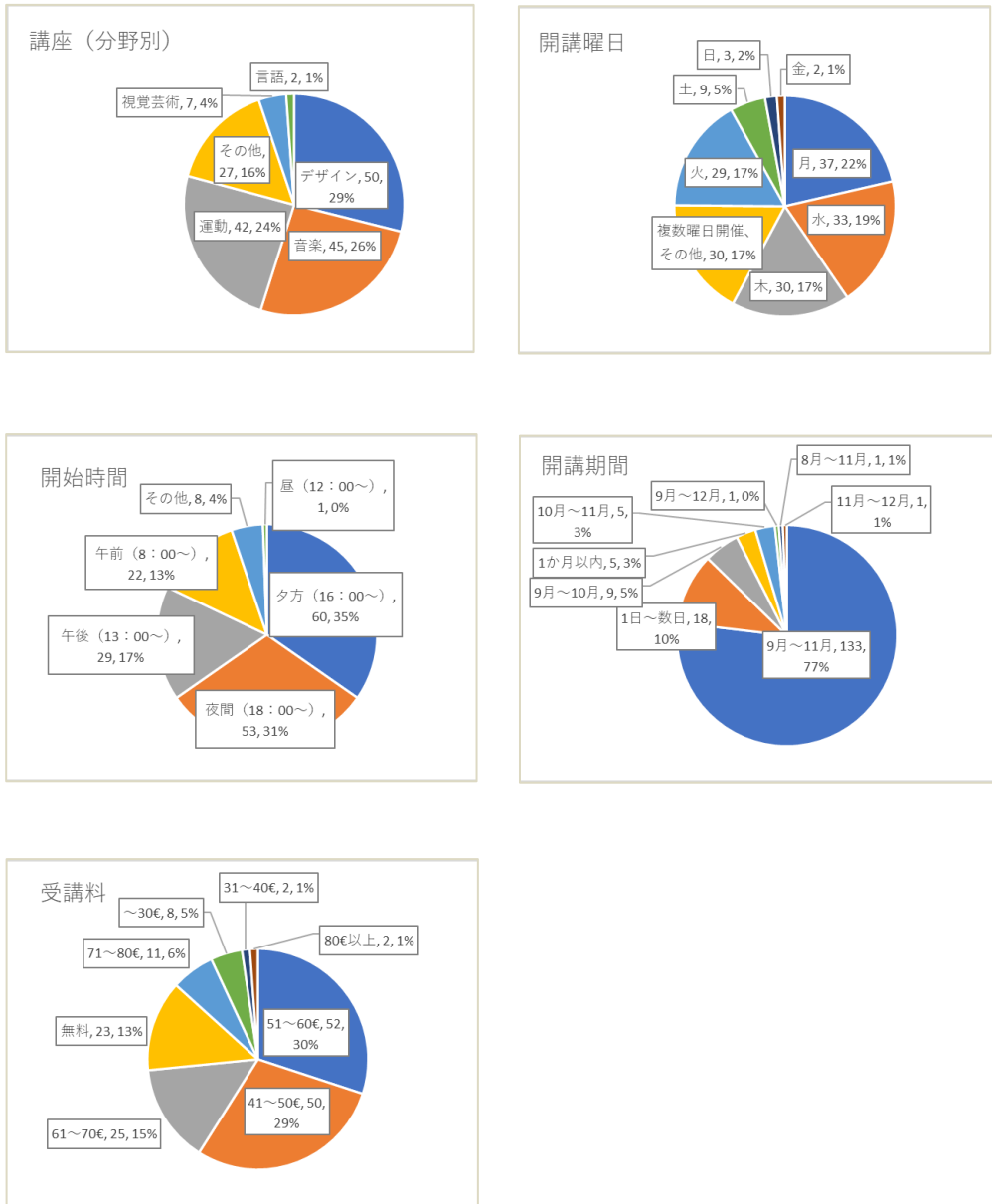
表1 ロヴァニエミ市市民カレッジの集落(村)ごとの開講状況(筆者作成)

集落(村)	市の中心部からの距離(km)	人口(人)	施設数	開講施設
ポロカリ	84	45	1	村の家
アウティ	75	94	1	村の家
マラッシャルヴィ	67	69	1	キュラティラ
ティアイネン	60	63	1	村の家
メルタウス	55	140	1	学校
ミスィ	52	71	1	施設
ヴァンタウスコスキ	52	209	1	学校
ハウキタイバレーヴァリヨキ	41	121	1	旧学校
ヤーティラ	39	164	1	村の家
ペルンカヤルヴィ	38	48	1	キャンプ場
ナルカウス	35	155	2	村の家、施設
ソンカ	31	189	1	村の家
タピオンキュラ	30	240	1	村の家
レヒトヤルヴィ	27	283	1	村の家
ヴィカヤルヴィ	26	177	1	学校
キヴィタイパレ	24	269	1	学校
ムーローラ	23	998	3	図書館、小学校、学校/ホール
シネッタ	21	618	4	小学校、多目的施設、パブ、村の家
ヒルヴァス	18	842	1	学校
ラウティオサーリ	18	557	1	学校
コスケンキュラ	13	838	1	学校
ニヴァンキュラ	12	488	1	施設
パーヴァルニエミ	9	—	1	学校
アラコルカロ	6	787	1	施設
ユリキュラ	4	1751	2	学校開放スペース、施設
サーレンキュラ	4	1422	9	図書館、保育園、中等学校、学校3校、講堂、カレッジスペース、クラブハウス
中心部	—	4490	2	音楽学校、施設

4.2 ロヴァニエミ市立カレッジの講座

次に、ロヴァニエミ市立カレッジの2019年秋季に開講された173講座の概要から、それぞれの属性を検討する。図1はロヴァニエミ市立カレッジで開講されている講座を属性別に示したものである。分野別では、デザイン(29%)、音楽(26%)、運動(24%)の順で多い。デザインにはハンディクラフト講座が、音楽には楽器や合唱が、運動にはフィットネスの他、ダンスが含まれる。その他(16%)には、タブレットとスマートフォンの使い方講座や演劇などがある。インタビューで挙がらなかった講座の中には、フライフィッシング用の針の作成、小型機械や家具の修理、野菜色素での染色、イコンのペインティング、大道芸などもある。講座は参加型であり、講演だけの科目は殆ど見られない。また、語学講座は英語関連の2つのみである。

図1 ロヴァニエミ市市民カレッジの講座属性 (筆者作成)



開講日は月曜日 (22%)、水曜日 (19%)、木曜日と複数曜日開講・その他 (17%)、火曜日 (17%) といずれも上位に平日が来ており、土曜開講は若干見られるものの、金曜日と土日の開講は少ない。全体の 75% の講座が月曜～木曜の間に開講されている。

講座の開始時間は、夕方 (16:00～、35%) からが最も多く、次いで夜間 (18:00～、31%) と、夕方と夜間で全体の 66% を占める。一方、午後 (17%) と午前 (13%) の合計は 30% であった。

開講期間は、9月～11月 (77%) が大部分を占めており、少数ながらも 1日から数日のタブレッ

トとスマートフォンの使い方のような単発イベントも開催されている。

受講料は、多い順から 51～60€ (30%、2020 年 10 月 30 日現在 6,223～7,321 円)、41～50€ (29%、5,002～6,100 円)、61～70€ (15%、7,443～8,541 円) である。

4.3 ロヴァーラ・ロヴァニエミ市民カレッジの講座

市立カレッジと同じ小冊子の後半部分に記載されたロヴァーラ・ロヴァニエミ市民カレッジの 2019 年秋季 206 講座の属性を図 2 に記した。

分野別では、運動 (22%)、言語 (19%)、デザイン・クラフト (17%)、音楽 (16%) の順が多い。ここには記していないが、高齢者向けや子ども向けなど年齢層に合わせた講座やタブレットの使い方など情報技術に関する講座も提供している。また、市立カレッジには殆ど見られなかった単発の講演などもある。その他の料理教室には、寿司クラス、日本食クラス、中華料理クラスが含まれている。語学講座には、フィンランド語、スウェーデン語、英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、スペイン語、イタリア語、日本語、アラビア語がある。この地域に特徴的な講座には、ラップランドの歌を歌うというものがある。

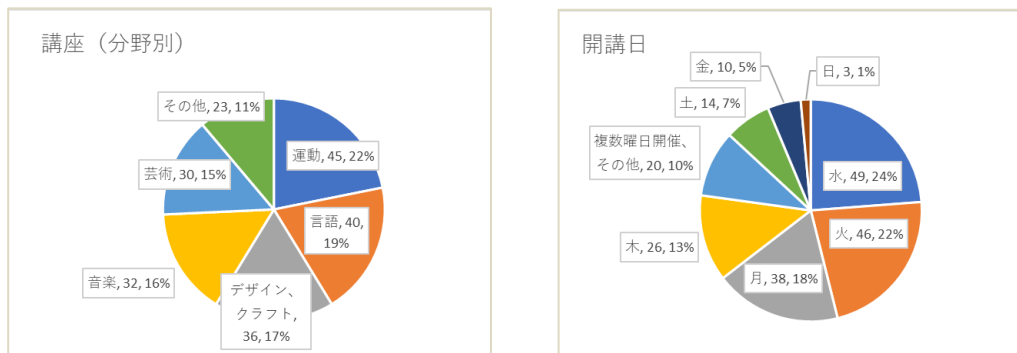
開講日は、水曜日 (24%)、火曜日 (22%)、月曜日 (18%)、木曜日 (13%) の順で多く、その平日 4 日間で全体の 77%を占める。土曜に若干あるものの週末の開講は少ない。

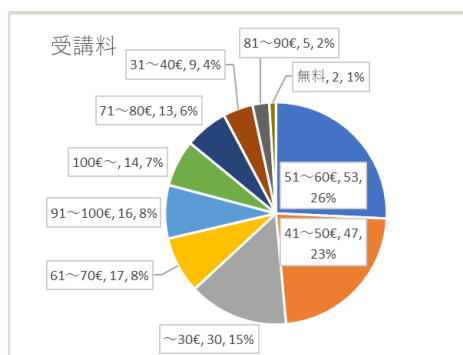
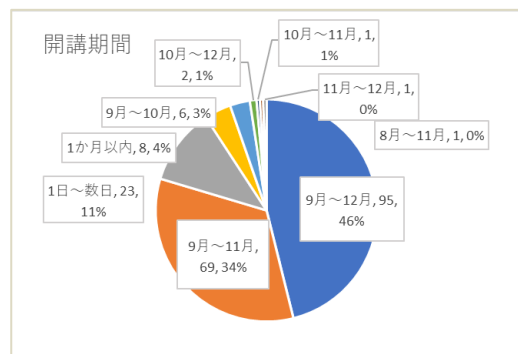
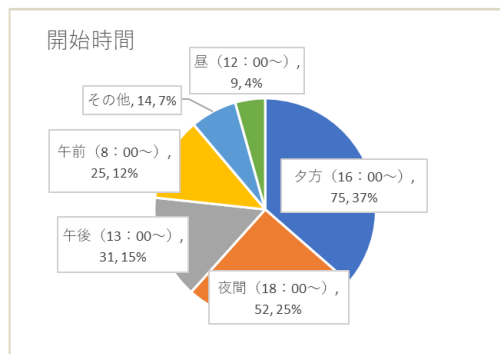
開始時間は、夕方 (16:00～、37%)、夜間 (18:00～、25%) で全体の 62%を占める。午後 (13:00～、15%)、午前 (8:00～、12%) の合計 27%と比べても、夕方以降の開講が多い。

開講期間は、9～12 月 (46%)、9～11 月 (34%) であり、2～3 か月講座が約 8 割である。

受講料は、51～60€ (26%) が最も多く、次いで 41～50€ (23%)、30€より少額で受講できる講座も 15%ある。

図 2 ロヴァーラ・ロヴァニエミ市民カレッジの属性 (筆者作成)





5. 考察

2つの市民カレッジへのインタビュー調査、小冊子の分析から、ロヴァニエミにおいて、住民の生涯学習への参加に寄与していると考えられる、特徴的な事柄は次のとおりである。

第1に、市立と私立の間で、地理的にも、講座に関して役割分担が行われている点である。重複を避けることで、中心部に集中することなく、周辺地域にまで行き届いた学習機会の提供が可能となる。また、講座内容（分野）に関しても、主に市立カレッジが狩猟免許講座をはじめ、ラップランド地方に特徴的な講座を多く設けているのに対し、ロヴァーラは講演の他、様々な言語の学習機会を提供している。両者が協力関係にあることで、すみ分けが可能となっていると考えられる。

第2に、講座の開講時間の多くが、月曜から木曜までの平日の夕方や夜間に設定されていることである。ロヴァニエミでは、全講座の6割以上が16時以降の夕方・若しくは18時以降の夜間、7割以上が月曜から木曜までの平日に開催されている。森田（2017）の先行研究でも触れられた通り、残業が少ないことは、労働者の平日夜の講座への参加を可能にする。また、国際的な会計事務所であるグラントソントンの調査によれば、日本では僅か18%に過ぎないが、フィンランドでは92%の企業が時間と場所にとらわれないフレキシブルワークを導入しているという（11）。このような労働環境も平日夕方・夜間参加と無関係ではないであろう。

第3に、ニーズ調査を入念に行った後に講座設計へと至っている点である。基礎教育が無料である

ことから、生涯学習へ向けられる評価が厳しい中で、その地域の人々が何を求め、何を学びたいのかを施設側がフィードバックや意見集約の場を積極的に設けて、汲み取る努力をしている。

第4に、既存の施設が活用されていることである。学校、保育園、図書館などの教育施設から、村の家など、生涯学習用に新たな施設を建設せずとも活動を始められることが大きなメリットである。市立カレッジが市内全域で活動できているのも、施設活用がある程度かかっていると考えられる。

第5に、受講料が安価に抑えられていることである。6,000～7,000円で2～3か月の講座を受講することができる背景には、大橋(2010)が記した通り、国による財政面での支援がある。公立・私立にかかわらず、リベラル成人教育法で定められた57%が支援される。

最後に、市民カレッジが積極的な広報活動を進めていることを挙げておきたい。新聞やフェイスブックを用いた従来の方法に加え、講座案内の小冊子を繁華街のラックに常時設置しており、市立カレッジでは講座のデモンストレーションまで行われていた。

6. まとめ

本稿は、フィンランド・ラップランド地方の都市ロヴァニエミの市民カレッジへの現地調査から、公立と私立の市民カレッジの役割分担、開講時間・曜日の設定、学習者のニーズに基づいた講座設計、既存の施設の活用、安価な受講料、積極的な広報活動が、現地の生涯学習機関に特徴的かつ、同国の生涯学習への高い参加率に寄与しているのではないかと結論付けた。

今回調査対象とし、筆者が2019年8月に訪れた2つの市民カレッジは、翌9月に統合を決め、2020年1月1日よりロヴァーラが市内の全ての市民カレッジ事業を担うこととなった。それに伴い、ロヴァニエミ市立市民カレッジ(Rovaniemen kaupungin kansalaisopisto)の名は消えてしまった。寂しい限りである。両カレッジの統合については、ロヴァニエミ市が近隣自治体と合併した2006年から既に話し合いが進められていたようだが、権利の分配等でなかなか合意に至らなかったようである⁽¹²⁾。講座案内パンフレットを初めて共同で出版した2019年は、今考えると、統合へ向けた最終段階に入っていた時であったと言えるだろう。

今回の調査では、フィンランド国内の北部ラップランドの中心都市であるロヴァニエミを対象とした。今後、同じく北部のオウル、東部のヨエンスー、中部のユバスキュラなどの地方都市、ヘルシンキ首都圏の大都市、可能であれば農山漁村との比較を行い、生涯学習の参加率向上にかかわるフィンランド国内の共通の要因と共に、地方やその地方の産業や文化に根差した特徴的な要因についても明らかにし、フィンランドの生涯学習の全体像を描いていきたい。

謝辞

本研究は科研費(19K14070)の助成を受けたものである。

《参考文献》

- (1) 文部科学省ホームページ. 令和元年度 文部科学白書：文部科学省. (2020年10月26日閲覧)
https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab202001/1420041.htm.
- (2) 森田佐知子. 生涯学習社会におけるキャリア形成支援の課題：フィンランドにおけるインタビュー調査より.
佐賀大学全学教育機構紀要 / 佐賀大学全学教育機構 [編], no. 5. pp.127-36 (2017)
- (3) 大橋裕太郎. フィンランドの成人教育に関する考察 成人教育センター, オープンユニバーシティ, 図書館に
着目して. 地域活性研究 5. pp.63-72 (2014年)

《注》

- (1) Education at a Glance 2014: OECD Indicators. (2020年10月26日閲覧)
https://www.oecd-ilibrary.org/education/education-at-a-glance-2014_eag-2014-en.
- (2) Opetus- ja kulttuuriministeriö. Liberal Adult Education. (2020年10月30日閲覧).
<https://minedu.fi/en/liberal-adult-education>
- (3) Oy, Edita Publishing. FINLEX® - Ajantasainen lainsäädäntö: Laki vapaasta sivistystyöstä 632/1998.
Oikeusministeriö, Edita Publishing Oy. (2020年10月30日閲覧)
<https://www.finlex.fi/fi/laki/ajantasa/1998/19980632>.
- (4) Valtion talousarvioesitykset. (2020年10月30日閲覧)
<https://budjetti.vm.fi/indox/sisalto.jsp?year=2019&lang=fi&maindoc=/2019/aky/aky.xml&opennode=0:1:11:265:699:723>
- (5) Kansalaisopistot.fi. (2020年10月30日閲覧) <https://kansalaisopistot.fi/>.
- (6) Tilastokeskus. Väestö. Tilastokeskus. (2020年10月30日閲覧)
https://www.tilastokeskus.fi/tup/suoluk/suoluk_vaesto.html#V%C3%A4est%C3%B6llinen%20huoltosuhte%20kunnittain.
- (7) In English - Rovaniemi international. (2020年10月30日閲覧)
<https://international.rovaniemi.fi/en>.
- (8) Rovaniemen kaupungin kansalaisopisto. (2020年10月30日閲覧)
<https://www.facebook.com/rovaniemenkaupunginkansalaisopisto/>.
- (9) Rovaniemen kaupungin kansalaisopisto, Rovala Rovaniemen Kansalaisopisto, Opinto-Ohajelma
Syyslukukausi 2019.
- (10) Toimintaympäristön tilastot 2018, Rovaniemen kaupunki. Väestö pienalueilla vuonna 2016
<https://www.rovaniemi.fi/loader.aspx?id=7baf4593-e881-4a92-b30a-99a5a90de028>
- (11) Why Finland leads the world in flexible work - BBC Worklife. (2020年10月30日閲覧)
<https://www.bbc.com/worklife/article/20190807-why-finland-leads-the-world-in-flexible-work>.
- (12) Kansalaisopistot Rovaniemellä yhteen ja osakeyhtiöksi?, yle uutiset. (2020年10月30日閲覧)

<https://yle.fi/uutiset/3-8912717>